昭和53年3月、宮崎県において奨励品種に採用された「みやにしき」について 育成の経緯と特性の概要を報告する。

本品種の育成にあたって適応性および特性の検討のために多大の御協力をいただいた関係県農業試験場の担当者各位に厚く謝意を表す。とくに宮崎県総合農業試験場栽培部品種科、栽培科各位には奨励品種採用にあたり格別のご御協力をいただき、西都市長の田原本雄氏には本品種のいちもち病抵抗性検定試験に御協力いただいた。

ここに記してこれらの方々に謝意を表する。

育種目標および育成経過
昭和45年の宮崎県における早期栽培は全水稲作付面積の32％、13,600haで、品種別作付割合は「コシヒカリ」53％、「宮崎7号」20％、「トドロキワセ」9％、「ヤマセキシ」4％であった。早期栽培は、沿海地帯における災害対策と新公園地の開発、栽培作物導入超早稲米として市場で好評なること等からその栽培は定着しているが、これらの品種は北陸東北地方からの導入であって、耐塩性、耐塩性、いちもち病抵抗性、米質等の特性は必ずしも十分でない。宮崎県では昭和40年より県単事業として早期栽培用の新種品種育成試験を実施しており、当時は「コシヒカリ」の早熟化、強張、耐病化を主要育種目標として試験が進められていた。

昭和45年に41組合せの交配が行われた。その中には早生、良種の関東79号を母として、いちもち病抵抗性の高い耐塩性の高いトドロキワセを父とした交配組合せが計画された。昭和45年春には母体を養成して交配を行ない、同年秋温室栽培でF1を養成した。翌46年はビニールハウス内の密植栽培でF1およびF2世代の雑種群を養成した。F2世代は木田種別系統として1系統当たり5個体ずつ栽培し個体選抜を行なった。本組合せは福早生から極早生まで広い開期日を通じて、栽培栽培から早作栽培まで適応していた。また、耐塩はやや細くなり、草状、熟色とも良好で米質もよく有望な組合せであった。「トドロキワセ」程度の早生で短〜中早作、強張、適発芽性難〜中。良質のものに個体選抜の中心があり118個体が選ばれた。F1世代より系統選抜が行われた。F2世代では生産力検定予備試験に供試され15系統群のうち早系201が有望と認められた。これに「宮崎16号」の系統名を付し、F1世代より生産力検定試験に編入するとともに関係県に配布し奨励品種決定試験に供試した。宮崎県では昭和50年予備調査し、51年以降は本調査ともに現地調査に供試し、52年は新品種実証試験を実施した。その成績は良好であって、昭和53年2月13日「みやにしき」と命名され、宮崎県の奨励品種に採用された。

特性の概要
「みやにしき」の特性は、稈はやや細く、締きは中等で、無色、先先は色白、先色は尤好である。粒形は丸型中、硬粒性は難、玄米は中形でやや厚く、粒大は中の小粒である。止葉は直立し熟色の良い粳種である。

栽培、成熟期は「ムツシキ」程度で、「コシヒカリ」より5日程度早く、宮崎県早期栽培では中に属する。

栽培は「ムツシキ」より5cm、「ムツシキ」より10cm程度短く、締米は「コシヒカリ」よりやや短いが穂数は多い早段種数である。

玄米の品質は基 overturn, heart, Alex 書くほど少なく、光沢
よくみかけの品質は「ムツニシキ」、「トドロキワ」にまぎ、コシヒカリ」と同程度に良い。食味についても「コシヒカリ」と同等ないし僅かに劣る程度で良好である。

生産力は、「ムツニシキ」にまぎく早期用中生種としでは多収である。耐倒伏性は短稈のため「ムツニシキ」、「コシヒカリ」より強い。いちもち病抵抗性は変性抵抗性遺伝子 Pi-i をもつと推定され、耐病抵抗性は病いもち病に対しては「トドロキワ」にやや劣る。これらを比較して「ムツニシキ」並の強であり、いちもち病に対する抵抗性はかなり安定している。白葉枯病に対しては「コシヒカリ」より劣る、やや弱とみられる。人为的に日照を制限した場合の不稔の発生程度は、「ムツニシキ」より少なくて、「コシヒカリ」並みられる。種発芽性は「ムツニシキ」にまぎ、「コシヒカリ」に僅かに劣りやや難である。

栽培適地および採用理由
　宫崎県の奨励品種採用理由は次のとおりである。宮崎県の昭和52年度における早期用稲種12,341haの品種別作付面積は、「コシヒカリ」11,135ha、「トドロキワ」583ha、」ムツニシキ」394ha、その他の品種230haである。」コシヒカリ」は品質、食味がよく超早稲米として高い評価を受けているが、いちもち病に弱く、倒伏し易い欠点をもっており、いちもち病常発地区や野菜類地等での栽培には不適で、従来のような地帯や栽培法では、「ムツニシキ」、「トドロキワ」が主として栽培されてきたこれらの品種は、いちもち病に強いが白葉枯病に弱く、品質、食味も「コシヒカリ」より劣る市場評価は劣しくないので、これらに代わる「コシヒカリ」並の品質、食味をもつ強筋、耐病早熟品種が要望されていた。

「みよし」は「コシヒカリ並の栽培法では収量が低く、白葉枯病にやや弱い欠点をもつが、強筋でいちもち病に強く、品質食味も「コシヒカリ」並か、それに近似する良質品種であるので、本県早期栽培全般の産米改善のために「ムツニシキ」、「宮崎7号」およびその他の雑種の一部と、「トドロキワ」の大半に代えて、いちもちは常発地区や野菜栽培および家畜用が多施用田等に好適する品種として普及奨励する。普及見込面積は、約1,000haである。

栽培上の注意
　1穂数が少なく「コシヒカリ」に準じた栽培法ではそれ以上の収量は望めないので、栽植株数の増加、増肥等により穂数確保に留意する。

　栽培の発生は「コシヒカリ」よりやや多く、刈り返しは着色期の発生するおそれがあり、品質低下の原因となるので、適期収穫を勧める必要がある。また、白葉枯病にやや弱いので常発地での栽培をさけ、防除に留意する。

　命名の由来
　宮崎県総合農業試験場（県立）育成の品種であり、将米、宮崎県早期稲米の評価向上に貢献する品種であることに因む（宮崎）。